中共の違約、人民の誓約――反送中運動の回顧と展望

區龍宇　2020 年 6 月 29 日

立場新聞「抵抗一年　論評特集」

原文
https://www.thestandnews.com/politics/%E4%B8%AD%E5%85%B1%E6%AF%80%E7%B4%84-%E4%BA%BA%E6%B0%91%E7%AB%8B%E7%B4%84-%E5%8F%8D%E9%80%81%E4%B8%AD%E9%81%8B%E5%8B%95%E7%9A%84%E5%9B%9E%E9%A1%A7%E8%88%87%E5%89%8D%E7%9E%BB/?fbclid=IwAR1N1Ac7totb_ibaXg02xsc8QZLuTCFD1I6Gp-ZXIQ9zyCLV7Ji0GJ38BFc

香港人はこれまで「金の卵を産むガチョウ」という本分を守ってきた。北京が自分たちを「動物農場」に放り込まずに、放し飼いにしてくれさえいれば、それで満足だった。しかし北京は自分たちが橋を渡ると床板を剥がしてしまうように約束を守らない政権だったので、香港人は退路を断たれて抵抗するしかなくなった。そして抵抗するということは、これ以上ガチョウには甘んじるのではなく、人間として正々堂々と生きることを意味した。北京と香港の衝突は避けられない情勢となった。

◆97 世代と香港人アイデンティティ

2014 年の雨傘運動は要求の点でいえば、それまでの 30 年の軌跡を受け継ぎ、普通選挙と自治を実現しようとするものであった。だが方法論でいえば、大衆的な自発性、自主性、対自（自覚）性という特徴をもち、最初から強烈な市民的不服従を実行したという点で、それまでの 30 年とは根本的に区別される。2019 年の反送中（容疑者を中国に送還する法案に反対する）運動は、雨傘運動の大衆的自発性をさらに強烈に引き継いだ。いまや大衆が歴史の舞台に登場したのである。

無数の人間が無数の時々に、香港人の歴史的軌跡を回顧し、次のような結論を導き出すことはそう難しいことではなかった――香港人は中国人（華人）ではあるが、1949 年以降は、大陸の華人と極めて異なる歴史を歩んできた、台湾の華人とはそれなりに似ていなくもないが、やはり違いはある、と。香港人は（自由とは何かを知っているので）自由への侵害に充分警戒しており、自らの尊厳はこれまで（英植民地時代）も承認されてこなかったが、北京の統治下でそれは悪化するだけであると感じている。上の世代は運命には逆らわなかったが、2014 年以降は、わたしが「97 世代」と名付ける世代（97 年の香港返還前後に生まれた世代：訳注）は、運命だからといってあきらめない世代だった。過去 30 年の民主化運動の成果と欠点から、「香港人アイデンティティ」と民主化追求を導き出し、それを抵抗の力として、多数の香港人をけん引して北京と直接対峙した。

◆反送中運動の成果

雨傘運動はそれまでの社会運動に比べても広範な大衆的基礎を持った運動だったが、それでも支持が住民の四割を超えることは困難だった。だが反送中運動の支持は 7 割にも達した。支持は運動の衰退とともに減少したが、戦後の香港で最大の大衆的政治運動であったことに疑いはない。

民主意識の普及

1970 年代以前は、比較的規模の大きな大衆的政治行動は、国民党あるいは共産党が発動したものであったが、増加しつつあった香港人口の多数の支持をかちとることは難しかった。1970 年代にはいってやっと本当に土着の運動が登場する。それらは 40 年代から 50 年代生まれの人々がけん引した運動で、のちに香港民主化運動の第一世代のアクターとなる。しかしこの世代の民主化運動の大衆的基盤はやはり脆弱であった。香港人口の中核はまだ強い難民／臣民的意識に支配されおり、社会的あるいは政治的な要望は高くなく、それゆえに政治に対しても冷淡であった。反送中運動によって、人口の多数が自治と民主の要望を行動で表現するメインストリームになったのである。これは政治意識と香港人の主体性の飛躍であった。

2019 年に反送中運動が醸成されつつある段階で、ネット上の議論において雨傘運動が敗北した理由として、「和理非」（平和・理性・非暴力）派と「勇武」（武闘）派の衝突があげられていた。反送中運動はこの敗北の轍を踏まないように、和理非派と勇武派は分裂せず協力しなければならないとされた。この議論は、雨傘運動の事実を描写するという点については、真実ではない。なぜなら当時、二人の黄と一人の陳（黄毓民、黄洋達、陳雲：香港ナショナリスト右派）が社会運動活動家、学聯、オキュパイ 3 君子らのオキュパイ・セントラル運動の代表的人格を敗北主義だと激しくののしり、非難された側は基本的に反撃しなかった。つまり双方が衝突したという事実はなかったのである（和理非が勇武から一方的に非難された：訳注）。雨傘運動の敗北の根本的原因は、そもそも存在もしない「運動内部の衝突」とは無関係である。だが、この「経験の総括」は事実誤認はあるにしても、「協力して北京に対抗する」という結論においては、怪我の功名とでもいえる結果になった。とはいえ、この正しい結論しか出すことができなったというのが本当のところである。民間人権陣線（民陣、和理非派の代表的な運動プラットフォーム：訳注）は 2019 年 6 月 6 日にデモを呼びかけ、そこに民意を結集させるうえで大きな功績を果たした。（法案採決が予定されていた）6 月 12 日には万に上る青年たち（勇武派の代表的集団：訳注）が立法会を包囲し、衝突に発展した。政府が民衆の怒りに直面することになったという意味でも極めて重要な闘争であった。泛民主派（既成の民主化運動で、ほぼ和理非派と重なる）と勇武派は非難し合うこともなく、その後の運動のピークに向けて良好な基礎をつくることになった。別個に進んで共に撃つという、戦術が違っても協力することが可能であることを証明した。この協力の実現によって今回の偉大な運動が誕生したのである。

<u>専制的権威主義への挑戦</u>

小さな都市で、巨大な民意を背景に激しく抵抗し、最も頑固な政権に譲歩を迫って意外にも悪法を撤回させることができた。これは人民の勝利である。2020 年に北京は全面的な反撃にでることになったが、この一年の抵抗運動はいずれにせよ人民の意志を成長させ、専制体制の権威に大いに挑戦した。これは香港と中国という二つの地域の民主化運動にとっての一里塚である。

香港人は闘争のなかで香港政府に抵抗する勇気を鍛えていったが、直接北京政権に抵抗することはあまり考えてこなかった。雨傘運動のときは、旺角に習近平の像が設置された。その評価は人によってさまざまだが、このような遊び感覚も、一国二制度下において対岸から家事を見るような態度を多少とも反映していた。2019 年、人々の感情は大いに変化した。悪法それ自体もそうだし、運動の展開に伴う政府の対応にしてもそうであるが、香港を押しつぶそうとする中国共産党の陰謀はますますあからさまになっていった。中国共産党と香港自治は両立しないことはほとんど疑いない。こうして、専制の暴龍に直接対峙しなければならないことを人々は悟ったのである。真実は残酷である。成熟した人間であれば、北京と香港の力は完全な非対称にあることを知っている。だが自ら幻想を打ち破ることもまた良いことである。過去数十年のあいだ、香港人は「井戸水と川の水は交わり合わない」（井戸＝香港、川＝中国で、相互に不干渉）という幻想のなかで生き続けてきたことで、意志が麻痺し、そ

れが今日に至る状況を作ってきた。だがどれだけ甘い春の夢も覚めない夢はない。抵抗を通じて覚醒することは、感覚が麻痺したままで生き続けるよりもずっといい。

表面的には、逃亡犯送還条例反対運動の五つの要求のうち実現したのは（法案撤回の）一つだけで、他の要求（612暴動規定の撤回、逮捕者の不起訴、警察暴力の独立調査委員会、普通選挙）については、せいぜい部分的な実現にすぎず、（全く要求が実現しなかった）雨傘運動よりも少しマシなだけである。しかし物事の成否だけで判断するのは、凡人の考えである。暴龍という悪魔に直面した民主化闘争の長期化は必然であり、一つの戦役だけで結果を図ることはできない。重要なのは、それぞれの戦役の経験から教訓をくみ取ることにある（筆者はこれまでも社会闘争を、たとえば理工大学攻防戦のような個別の「戦闘」、条例撤回運動のような一つのテーマを巡る「戦役」、そして民主化運動のような大きな目標としての「戦争」の三つに区分して分析している：訳注）。

<u>歴史の舞台に踏み出した大衆</u>

過去 30 年の民主化運動の中心は選挙運動であり、社会的闘争の割合は少なかった。選挙には独自の役割があるが、硬直した専制に対応するために一番重要な戦線は議会や選挙ではなく、社会闘争であり、実際の抵抗のなかで人民の政治能力と意志を鍛えることである。選挙政治は抵抗政治に従属すべきであり、逆であってはならない。だが中共の本質をはっきりと認識できない香港の反対運動はずっとそうしてこなかった。「一票入れてくれたら、あなたのお役に立ちますよ」といった代行精神は、多少なりとも市民意識の向上には役立つが、市民が政治家に依存する習慣を強めることにもなり、民衆が自らの政治能力を鍛えることには不利になり、日和見主義へ陥る議員をつくることにもなる。これが香港返還以降、泛民主派の議員が指導する大きな抵抗闘争がなかったことの理由でもある。議員らはせいぜいのところサポートの役割を果たしただけであった。

2003 年以降、政府の方針を撤回させる事件が何度か発生したが、その多くが市民大衆の自発的な行動の結果であり、それは 2019 年にピークに達した。多少なりとも歴史を変えた大事件は、すべて大衆がみずから歴史の舞台に踏み出した結果であった。エスタブリッシュメントは大衆を見下してはいたが。結局のところ民主主義は制度ではなく、なによりもまず一種の動的な生命、つまりは幾千幾万もの市民が、それぞれの方法で同じ目的に向かってともに幸福を促進させることである。レベルの高い歴史のテストに合格してきた長い歴史を持つ市民であれば、民主は一時的に失われても必ずその手に取り戻すことができる。そのような民衆が不在なら、どれだけ支配者が上から民主を与えたとしても、それを維持することは難しい。反送中運動の成果は、幾千幾万の中低層の市民が自らの政治能力と意志を模索し、鍛錬したことにある。街頭で、コミュニティで、暴力警察に抵抗し、仲間を支援すると同時に、度胸を鍛え、思考することを学んだ。これは無形の至宝である。

◆反送中運動の限界

今回の運動には具体的な指導者はいなかったが、指導的大衆は存在した。９７世代である。この世代が運動をピークに導き、方向性、戦術を与えてきた。だが九七世代には十分な理論や事前の計画はなく、中国の８９年民主化運動と同じように、感覚に依拠して進展した。８９年民主化運動の学生たちの直覚（直覚的にわかること）は、絶対平和主義であり、労働運動との結合は断固拒否し、党に対する死諫（死を以て君主を諫める）にとどまった。それとは逆に、30 年後の反送中運動では「勇武」（武闘）的な抵抗を行い、三罷（ゼネスト。労働者、商店主、学生の三つのセクターのストライキ：訳注）を鼓舞したことを特徴とし、さらには「時代革命」を呼びかけるという、以前とはまったく違ったものになったのである。

革命の序曲は鳴ったが、革命は遅々として進まず

学生の前衛は 2019 年 6 月から度重なる宣伝と行動を開始し、8 月 5 日にははじめて大きなストライキを打つことに成功した。このときの高揚が市民のシンパシーを「勇武」闘争への参加に促すことになっていれば、おそらく革命的情勢に入っていた可能性があった。しかしそうはならなかった。北京が圧力をかけキャセイ航空での解雇（キャセイのトップが入れ替わり、関連部門の労働組合委員長が解雇された：訳注）が行われると、抵抗運動は次の戦術を提起できず、ゼネストの呼びかけは孤立した。それ以降も運動は続いたが、それ以上の高潮を作り出すことはできなかった。前衛青年らはそれに甘んじず、中文大学と理工大学での二つの戦役（11 月中旬）を作り出した。抵抗形態の点からいえば別の高潮を作りだしたといえるが、参加した大衆の規模で言えばそれほど多数だとは言えなかった。一般的な黄色派大衆（反政府派は黄色、政府派は藍色のカラーで分類される：訳注）は違法（無許可）デモへの参加については覚悟があり勇武派を支持もしているが、武装して警察と対峙するほどの覚悟まではなかったことが、この事実によって証明されている。もし実力的抵抗をさらにヒートアップさせていたら孤軍奮闘の危険性に陥った可能性があっただろう。二つの大学での戦役に続く抵抗運動は見られなかった。区議会選挙（11 月 25 日）以降は、運動は低潮へと向かったといえるだろう。非合法の武装闘争を行った活動家もいたが、それは運動の高揚というよりは、低潮を象徴していた。人々が武器を取って革命に向かう覚悟がないのなら、われら少数が「天に替わって道を行う！」（水滸伝の梁山泊の掲げたスローガン：訳注）というわけだ。だが老練な国家の暴力装置は、ほとんど武装らしい武装もなく経験らしい経験もない「勇武」派を易々と粉砕することができた。

時代革命は結局到来しなかった。せいぜいのところその序曲が奏でられただけである。もちろんそれは成果である。だが将来の勝利にむけて、さらに多くの準備が必要であることには変わりない。前衛青年らによる過去 30 年の民主化運動の総括は、「和理非」では全然ダメで、行動をレベルアップさせ、直接警察と武力で対峙して、「時代革命」の高みにまで引き上げていく、という単純なものであった。だがこのように荒っぽい「革命的直覚」だけに依拠していては、まずなによりも大多数の人々を諸君らの「革命」に参加させることはできないだろう。せいぜい良くても同情がよせられるくらいだろう。革命政治だけでなく、一般的な民主派政治においても、優れた直覚が必要であることは確かである。だがそれは必要条件であって、十分条件にはまったく達していない。政治能力は勤勉なる学習と鍛錬によってはじめてもたらされる。まして革命政治についてはなおのことである。

革命の肝は依然として政治闘争にあり

前衛青年たちはその直覚によって、中共という専制支配者には改良の余地がなく、それゆえに革命しかないということを知っていた。その直覚は正しい。数百年来の世界の民主主義革命の経験にも合致する。翻って東西の学識に精通している泛民主派は、自らが信奉する自由主義の経験と実践を忘れてしまい、ジョン・ロックの革命学説とトーマス・ジェファーソンの革命的生涯を忘れてしまった。李柱銘（マーティン・リー、泛民主派の代表的人格の弁護士で民主党の創設メンバー）は革命に反対する。もし失敗したら多くの死者が出るからだというのがその理由である。だがロックとジェファーソンはこう言っている。支配者による一時的な失政を人民は耐え忍ぶことはできる、だがもし人民が死をも恐れず革命にまい進するのなら、それは支配者集団が悪事の限りを尽くしたことによって罰を受けるのであり、そのときには人民は「時日曷喪，吾與汝皆亡」（＝この日はいつか滅びん、吾と汝ともに亡びんと。太陽はいつ亡びるのだろうか、その時にはこの暴君とともに亡びよう）という声を発するだろうと。それは自覚的な選択であり、われわれは歓迎するだけで反対する必要は全くない。

だがまさにそうであるがゆえに、反送中運動は、それほどの憤りと決意にまでに達することはなかった。前衛青年たちでさえもそうであった。もし今後、革命的情勢がやってきたとしても、今日の急進派青年らの思想的準備からいえば、それが成功するかどうかは心許ないであろう。なぜなら直覚は系統化された知識ではなく、重大な決定をするためにそれに依拠することはできないからだ。

日常生活ではナイフやハサミをつかう際にも気を付けるだろう。ましてや革命をあつかうとなればなおさらのことだ。もし直覚だけに依拠して革命をやろうとすれば、犠牲となる確率は極めて高いといえる。

前衛青年らは、革命とは武力で政府を打倒することだと考えている。こうして革命が純粋な軍事闘争に転化してしまう。中国の伝統である易姓革命にますます似通ってしまう。「皇帝は順番でやればいい。今年はウチだ」というわけである。だがこれは野心家のいう革命であって、現代の民衆が求める民主主義革命とはいえない。民主主義革命は、インスタント麺のようにすぐに出来上がる代物ではなく、ひとつの歴史的時期にわたるものである。大部分の時間は軍事闘争ではなく政治闘争に費やされる。はじめは人民の大多数の道義的な支持をかちとらなければならない。そのために日常的に専制体制の不当性を暴露すると同時に、人々の長期的闘争の思想的基礎をうちかため、道義（モラル）的な勢力を構築しなければならない。あわせて、さまざまな大衆的な改良的闘争をうながし、自らを鍛え上げなければならない。

野心家らも多数の支持を得なければならないことは知っている。だが民主派の政治闘争が野心家と異なるのは、事実と原則の歪曲や単なる感情的扇動ではなく、真実と科学を求め、道理と真実で民衆の抵抗を鼓舞するということにある。かりに誤った民意に一時的に抗することになったとしても真実を堅持する、これこそ民主派の原則でなければならない。真の民主派は道義（モラル）の二文字しか残らない素寒貧だが、この二文字こそが民主派の最も重要な武器なのである。

<u>理性はクソにあらず</u>

ポピュリズムに関する書籍の序文で「情感政治」を主張し、政治には理性が必要だという主張を非難し、「理性などクソの役にも立たない！」と叫ぶ文筆家もいる。この文筆家の義憤は、おそらく数十年来の「和理非」派に対する反発からくるものかもしれない。わたしはずっと、89 年民主化運動以来の「和理非」はまったく混乱した考えだと思っている。それは非暴力の必要性を極端なまでに誇張し、一切の武力が非理性的なものだと主張する。だが多くの状況における武力、たとえば自衛のための武装は理性的であり、また理性的でなくてはならない。だが先に紹介した文筆家は、「和理非」とは逆の極端に走っており、理性を完全に否定してしまった。わたしは民主政治あるいは民主革命には理性も情感も必要だと考えている。どのような大衆運動の高潮も、「義憤が胸中にあふれる」という情感の高揚のもとではじめて生じるものである。革命はさらにそうだといえるだろう。だからこそ革命情勢を把握することが難しいのである。完全にゼロと一だけで演算するＡＩに革命はできない。なぜならかれらは人間のように突如警告もなく臣民から革命的人間に変わるような芸当はできないからだ。逆に言えば、義憤が理性というチェックアンドバランスを欠くと、容易に単純な破壊的力になってしまう。民主政治にとって、理性と義憤はともに重要である。だがかの文筆家はこの二つを完全に対立させてしまい、民主政治の「情感政治」ではなく、煽動家や野心家の「情感政治」にはまり込み、「ミイラ取りがミイラになる」という落とし穴にはまっているのである。蒋介石と毛沢東はいずれも反弾圧・反専制の立場から運動を開始したが、最後にはその罠にはまってしまったことを教訓とすべきである。

「理性などクソの役にも立たない」論も反論に耐えうるものではない。たとえ軽率に目標を設定したとしても、

そのための手段を考えた時に「道具的合理性」は必要ないとでもいうのだろうか。ドイツのナチスでさえこの道理を理解していた。それゆえにナチスは、自らの反ユダヤ主義的感情にまかせて目的を選択したのだが、ホロコーストを実施する段階になると、大工業の理性（合理性）に従って、毒ガス室と収容所を緻密に計画したのである。

ばかげたことに、ヒトラーは「理性などクソの役にも立たない」という感情に多く支配され、道具的合理性の思考は脆弱であったことから、軍事専門家の見解を何度も否定し、攻勢一本槍の作戦に固執した。対ソ戦争では前線指揮官からの即時撤退要請をかたくなに拒否し、結局敗北した。理性はやはり重んじなければならないのだ。

<u>革命ってナンだ</u>

９７世代のなかで、ここ数年流行しているセリフがある。ひとつは「プロテスターは警察に対抗するときに等価武力を用いる」。これはやや自分たち自身を欺く内容である。プロテスターが警察と同じような装備ができるとでも？　解放軍との装備については比べるまでもない。このようなミスリードがその後に非合法に火器を購入したり爆弾を製造するということにつながっている。真の民主革命はそもそもこのようなものではない。民主革命は確かに実力で専制を打倒するための準備が必要であるが、武装のための武器入手が主要ではなく、政治活動から始めること、多数を獲得すること――武装するための大衆も含まれる――から着手しなければならない。民主革命の特徴はまさに人民の民主的勢力という点にあり、支配者を分裂させるに足る武装勢力にまで発展させることである。逆に、長期の軍事闘争にもっぱら従事することは、往々にして民主的成果をもたらすことを困難にする。なぜならそれは厳格な軍事的規律と服従が要求されるからであり、民主的習慣を運動内部で育むことを困難にさせるからである。

二つ目の流行り言葉は「限界（抑制）なき武力抵抗」こそ勇武の証しだという言葉である。だがこれもまた誤りである。「限界なき」？　では人間としての最低限度のモラルもないのか。「己の欲せざる所は人に施すこと勿れ」という限界はないのか？　武器を持たないものは傷つけないという限界はないのか？　民主と平等という基準の限界もないのか？

反送中運動には多くの有能な活動家がおり、実際には政治（宣伝）闘争についてもよく理解している。人目を惹くようなフライヤーや漫画などが作られ、（香港）傀儡政府の醜態や警察の暴力を暴露し、黄色派の信念と闘争の意志を固めてきたからだ。宣伝を通じた政治闘争、道義（モラル）の拡張、悪政の暴露だけでは物足りないことは確かである。社会運動も力の抵抗であり、街頭の抵抗も警察と反動的組織から公共空間と権力を奪い返すたたかいである。だが、民主政治には抵抗精神の堅持だけでなく、理性と平等、仁愛も忘れてはいけない。そうであるからこそ、暴力には細心の注意を払い、乱用してはならないのである。少なくとも、初心を忘れることなく、目標を達成したら暴力の行使はやめなければならない。これはわれわれが警察に対して常に言ってきたことではないだろうか（抵抗を止めたプロテスターの身体を拘束した後も報復的暴力を振るう機動隊を批判してきた：訳注）。民主派であれば一層のこと、武装していない人間に対して暴力を加えてはならない。去年１１月に、政府支持者に対して可燃薬品をかけて火をつけるという事件が発生したが、これは言うまでもなく暴力の乱用にあたる。事件の直前にプロテスターとのあいだで争いはあったが、火はもめごとが収まった後でつけられたからだ。もしプロテスターに対する攻撃をやめさせるのであれば、他にも様々な限定的な暴力手段はあったはずで、死亡する可能性のある放火という大それた方法をとる必要は全くなかった。注意すべきは、この事件のあとに行われたインターネットでのアンケートでは「やりすぎだとは思わない」と回答した人が 5000 人だったのに対して、「やりすぎだ」と答えた人は 300 人だけだったということである。民主派の KOL（Key Opinion Leader）のなかには、

心中ではこのような暴力に賛成していないが、表立って批判しない人間もいる。わたしはこのような暴力は、やりすぎにも程があると考えている。巨大な抵抗運動においては、ときに火の手の上がることは避けられない。だからといってその行為を合理化することにはならない。合理化する人間が確かにいるのは不幸なことである。

<u>民意と理性</u>

過度な暴力を抑制すること、それ自体は一種の善意の行動といえるが、その内在的価値以外にも政治的価値を持っている。それは、こうすることによってはじめて長期的に多数の支持を得て、新しい社会を建設することができるという価値である。わたしはここで「長期」ということを強調したい。なぜなら大衆の一次的な義憤は誤った判断を招くこともあるからだ。どうりで、火つけ事件を「やりすぎだとは思わない」回答が、「やりすぎだと思う」という回答を大きく上回ったはずだ。だが人々が冷静になれば、また違った考えもでてくる。民主派の役割は民意の無批判の追従者となることではなく、民主主義の原則を堅持しながら、正当で歴史のテストに合格した意志と精神の力を鍛え上げるために民意をサポートすることである。ゆえに、われわれは人間性の中における義憤の情感を大切にするし、理性もまた尊重するのである。「理性なんてクソくらえ」論は民主派の立場ではない。

もう一点、根本的な力関係の観点からいえば、一都市における革命が、広大な地域を支配する専制国家において、いかにして成功することができるのかという問題である。この問題を考える上で理性的な議論が必要ではないだろうか。まさか「人が大胆になれば、それだけ生産量もあがる」（中国の大躍進時代のスローガン：訳注）という唯心論が成り立つでもおもっているのだろうか。

これと似たような原則の間違いや過剰な行為が、反送中運動のなかで不必要な犠牲を招き、支援者の一部の求心力と自信にダメージを与えた。もしこれらの誤りを容認するのであれば、次のような総括が必要だろう。（一）９７世代には経験がなかったこと、そして上の世代が何も伝えてこなかったことが彼らを暗中模索に追いやった、（二）今後の発展からすれば、これは９７世代が政治化する最初の段階であり、この経験から真剣に教訓をくみ取り、将来さらに巧みに立ち回らなければならない。

雨傘運動と反送中運動に参加した香港人は、直覚においても自分たちの不足を感じ取っている。それは、この数年インターネットで流行っている「港豬」（ノンポリ）、「小學鷄」（厨房＝幼稚）、「圍爐取暖」（お友達グループ）、「同溫層」（フィルター・バブル＝自分の見たい情報だけを受け取る）、「當人係 condom」（使い捨て）などいくつものスラングにも反映されている。しかし問題を深く考えようとする見解はいまだ多くない。香港の陥落がせまるいま、金の卵を産むガチョウのままでいつづけることはできなくなった。だが人間として正々堂々と立ち上がろうとするのであれば、そのための準備は極めて不十分である。時代が香港人を呼んでいる。抵抗運動の高潮は一時的に終わりを迎えたが、香港啓蒙運動を発動する時がいまや始まったのである。

※訳者注：最後の「香港啓蒙運動」はフランス革命に先んじた「啓蒙主義運動」を含意していると思われる。次の革命情勢（中国を含む）を意識して、ラディカルな総括・理論・分析を訴えているのだろう。